

哲学的弁論術と第二のソフィスト術

堀尾 耕一

ローマ帝政期、紀元 230 年代に書かれたフィロストラトス『ソフィスト列伝』（以下『列伝』）は、その主題を「ソフィスト」と呼ばれる者たちの活動に特化した、他に類書を見ない貴重な論考である。そこでは、この言葉が古典期に帯びていた否定的な響きはすっかり影を潜め、主として帝政期に活躍したソフィストたちの営みが、とくにその弁論パフォーマンスに重点を置いたかたちで記述される。そして著者は、古代のソフィスト術と同時代のそれとの、ある看過しがたい違いに注意を促し、後者を「第二のソフィスト術」と命名する。

ひとえにこの著作に由来する「第二のソフィスト術」*Second Sophistic* という名称は、紀元 1 世紀に始まり 2 世紀をひとつの頂点として展開される広範囲な文化現象としての「ギリシア・ルネサンス」を言い当てる指標として、今日では主として文学および歴史研究の分野を中心に、ひろく市民権を得ているとあってよい¹。その際、本来は「第二のソフィスト術」を意味するはずの *ἡ δευτέρα σοφιστική*（すなわち *Second Sophistic*）という言葉は、紀元 1~3 世紀の文化活動全般について、「第二ソフィスト時代」ないしは「第二次ソフィスト思潮」の意味で用いられる場面が多く見られる。ただ、著者フィロストラトス自身の強調するところでは、この「第二の」*δευτέρα* という形容詞は時代区分の指標ではなく、あくまで質的な違いと解されるべきものだった。それでは、その違いとは何か。19 世紀以来その定義および評価をめぐる大いに議論が重ねられてきたこの「第二ソフィスト」問題をあらためて検証することで、ソフィスト的な営為の特質とは何か、また時代の推移によってそれがどう変わり、あるいは変わらなかったのかを考察するための、ひとつの視座を提供したい。

1. 問題の所在：『ソフィスト列伝』の記事

著作全体の性格について、まずは触れておくのがよいだろう。そもそも著作の献辞において、フィロストラトスは献呈相手であるゴルディアヌスの家系に関して、「ソフィストのヘロデス（アッティコス）を祖先に持つ、その術にゆかりの一族」という言い方をしている²。このことにも端的に表れているとおり、この著者の用いる「ソフィスト」という言葉には、基本的には、否定的な響きは認められないとあってよい。もっとも、古典期に

¹ Cf. Bowersock (1974).

² Philostr. *VS*, 479.

において「ソフィスト」という語についてまわったある種の抵抗感について、この著者が配慮を見せていないわけではない。たとえば次のような一節がある。

アテナイの人々は、ソフィストたちの帯びる「弁舌の巧みさ」*δευότης* を見てとり、彼らを法廷から締め出したが、それは彼らが不正な議論によって正しい議論を制し、その力量を不適切に用いていると見なされたからだった。それゆえ、アイスキネスとデモステネスとが互いを「ソフィスト」と呼び合うことにもなったのだが、しかしそれは裁判員の心証を悪くするためではあっても、その称号自体が不名誉なものだから、というわけではなかった。その証拠に、彼らはひとたび公の場を離れば、「ソフィスト」として称えられるのをよしとしていたのだから。

つまり、たしかに「ソフィスト」という称号にはある種の猜疑の目が向けられもしたが、それはむしろ彼らの抜きんできた能力ゆえであって、その呼び名が本来的に否定的な意味を有していたからではなかった。結局のところ、『列伝』の著者にとってソフィストとは、第一義的には「弁論家のうちでもことのほか弁舌の能力に秀で、輝かしい名声を得た者たち³」のことを指す。この他にも、「即興に通じていること」*σχεδιάζω* あるいは「取り憑かれたように話すこと」*θείως λέγω* といった要素が、彼らの特性としてしばしば強調される⁴。いずれにせよ注意しておきたいのは、フィロストラトスにおいては、「真・偽」ないしは「正・不正」といった認識論的ないしは意味論的な問題は主要な役割をはたしておらず、ソフィストの要件はあくまで「弁論能力」に存するとされている、という事実である⁵。このことを確認したうえで、彼が区分する二つのソフィスト術について、話を進めることにしよう。

『列伝』の本文は、「古ソフィスト術は「哲学的」弁論術と考えるべきである⁶」という言葉に始まる。さらに少しあとに、これを説明する次のような一節が見られる。

古のソフィスト術は、哲学的問題までも主題に掲げて、これらを長広舌で語っていた。すなわち、勇気について語るかと思えば、こんどは正義について語り、そして英雄たちや神々について、さらには宇宙の姿はいかにして出来上がったのか、ということまで語っていたのである⁷。

³ *VS.484: τῶν ῥητόρων τοὺς ὑπερφωνοῦντάς τε καὶ λαμπρούς.*

⁴ アイスキネスはこの両方の条件を満たす最初のソフィストであったという。Philostr. *VS.509.*

⁵ この視点は、哲学に軸足を置く従来のソフィスト研究ではほとんど考慮されることがなかったと言ってよい。これまでのアプローチの限界については、納富『ソフィストとは誰か』とくに序章および第1章の議論を参照されたい。

⁶ *VS.480: τὴν ἀρχαίαν σοφιστικὴν ῥητορικὴν ἡγεῖσθαι χρὴ φιλοσοφοῦσαν.*

⁷ *VS.481: ἡ μὲν δὴ ἀρχαία σοφιστικὴ καὶ τὰ φιλοσοφούμενα ὑποτιθεμένη διήει αὐτὰ ἀποτάδην καὶ ἐς μῆκος, διελέγετο μὲν γὰρ περὶ ἀνδρείας, διελέγετο δὲ περὶ δικαιοσύνης, ἡρώων τε πέρι καὶ θεῶν καὶ ὅπῃ ἀπεσχημάτιζται ἡ ἰδέα τοῦ κόσμου.* なお、戸塚・金子訳『列伝』はおおいに参考

ここでは、哲学的な弁論術 *ρήτορικὴ φιλοσοφούσα* とは、哲学的な問題 *φιλοσοφούμενα* をもその主題に掲げるような営みである、と敷衍されている。これに対して、「第二の」ソフィスト術については次のように説明される。

この後にくるソフィスト術は——これは「新しい」と呼ぶべきではなく（古くからあるものだから）むしろ「第二の」と呼ぶべきものであるが——、貧乏人や金持ち、王侯や独裁者たちを描き出し、歴史上の個々具体的な論題を扱った⁸。

これが「第二ソフィスト」*ἡ δευτέρα σοφιστικὴ* という用語の由来となった一節であり、また古代におけるこの言葉の唯一の定義でもある。ここでの「第二の」という形容は時代区分を意味するものではない、と著者はわざわざことわっている。じっさい、『列伝』において「第二の」ソフィストとして最初に言及されるのは前4世紀の弁論家アイスキネスであり、これを額面どおりに受けとるなら、「第二のソフィスト術」は前4世紀にまで遡る、ということになろう。ところが、その次に言及されるのは紀元後1世紀にスミュルナを中心に活躍したニケテスであり、以降、著者の時代に至るまでの40人にのぼるソフィストたちに関する記述が続く。したがって実質的には、紀元後1～3世紀の文学活動を指して「第二ソフィスト時代」という名称を用いること自体に、ほとんど不都合はないといえてよい。

しかしそれにしても、アイスキネスとニケテスとのあいだに横たわる3世紀分の時間についてまったく言及がないのは、奇妙というほかない⁹。そして、「第二の」ソフィストの始まりとして、何ゆえアイスキネスの名前が挙げられているのか。しかも、実際には「哲学者」であったのに世間では「ソフィスト」と見なされていた一群の人々を取り分けたいうえで、それとは区別されるべき、いわば「本当のソフィストたち」を論じるというその著述の方針は、まったくもって読者を当惑させるし、およそ明解な図式だとは評しがたい¹⁰。

とさせていただいたが、この箇所についてはニュアンスを違える。すなわち、下線部の *καί* は直後の *τὰ φιλοσοφούμενα* を強調するはずである。

⁸ VS.481: *ἡ δὲ μετ' ἐκείνην, ἣν οὐχὶ νέαν, ἀρχαία γάρ, δευτέραν δὲ μᾶλλον προσρητέον, τοὺς πένητας ὑπετυπώσατο καὶ τοὺς πλουσίους καὶ τοὺς ἀριστέας καὶ τοὺς τυράννους καὶ τὰς ἐς ὄνομα ὑποθέσεις, ἐφ' ἧς ἡ ἱστορία ἄγει.*

⁹ この問題については、著者の手元にある資料の制約、あるいは伝存の『列伝』テキストそのものの欠損を見る考え方もあった。Cf. Boulanger p.59. ヘレニズム期に入って弁論術にある種の質的な変化が生じたという見通しは、たとえばキケロやクインティリアヌスなども示しているが、その際にいつも言及されるのはファレロンのデメトリオスであり、そこにアイスキネスの名前は見られない。Cic. *Orat.*92; Quint. 2.4.41. etc. Cf. Fairweather, p. 108. なお、アイスキネスとニケテスのあいだの時期に活動した弁論家たちの名前が、知られていないわけではない。Cf. H. Bornecque, *Les déclamations et les déclamateurs d'après Sénèque le père*, Lille 1902; Russell, p.8.

¹⁰ たとえば Anderson (1986), p.11 はこれについて 'The scheme is sadly out of joint' と評している。なお近年では、この『ソフィスト列伝』という著作それ自体が、ある種のソフィスト的（ないしは演示的）な性格を帯びたものとして読まれるべきだという指摘もなされている。Cf. Schmitz.

ここで何をにおいてもまず整理すべきは、著者が区別の指標として用いている、「哲学」*φιλοσοφία* および「弁論術」*ῥητορική* そして「ソフィスト術」*σοφιστική*、およびその周辺語それぞれの関係であろう。これらの営みは、明らかに何らかの部分を共有しており、それでいてまったくの同義ではありえない性質のものであるに違いない。著者は必要以上にこれらの名称の相違点を強調しているのだ、と G. Bowersock は指摘する¹¹。前二者が専門家としての呼称であるのに対して、ソフィストとはそれらの術に関わる者が一般の聴衆に向けて、今日的にいうなればマス・メディアに露出した姿を指すものだという G. Anderson の説明も、あながち見当違いなものではないのかもしれない¹²。ただ、これらの術語が背負っている歴史的背景、そしてそれぞれの時代に応じた固有の意味合いについては、もう少し丁寧な検討が求められてよいのではないか。

2. 第二のソフィスト術と「アッティカ主義 / アジア主義」論争

かつて「第二のソフィスト術」の定義をめぐって、議論が交わされなかったわけではない。むしろ、この問題をめぐっては、古典学史のうえでも稀に見るほど華々しい論争が展開されてきたし、またそこに登場するのも、E. Rohde や E. Norden、そして U. von Wilamowitz といった、19 世紀後半の古典文献学を代表する大家たちであった。けれども一連の議論は、その始まりからして、もうひとつのやっかいな問題である「アッティカ主義とアジア主義」という文体上の論争と複雑に結びついてしまっており、結局のところ、「第二のソフィスト術」とは何かという問いに関して、必ずしも有効な見通しを提供することにはならなかった¹³。

古代においてはまったく注目された形跡のない「第二ソフィスト」という言葉に焦点が当てられるきっかけとなったのは、1876 年に発表された Rohde の著書『ギリシア小説とその先駆け』であった。ギリシア恋愛小説の起源を問うこの論考において、彼は「第二ソフィスト」*die zweite Sophistik* という言葉を取り上げ、これをキケロ晩年期の著作で話題とされている装飾過多な「アジア風」弁論の再興と捉え、何か本質的に新しいものがそこで生じたわけではない、と評した¹⁴。なるほど、フィロストラトスの列挙するソフィストたちの多くは、ミレトス、エフェソス、スミュルナ、タルソスといったアジア諸都市の出身である。「第二の」ソフィストの筆頭に挙げられているアイスキネスもまた、その晩年にアテナイを追われ、ロドス島を活動の拠点とした。ただ、こうした地理的な条件と、キケロが問題にしたような文体上の傾向とは、やはり次元を異にする問題ではないか。むしろこの時期を代表する散文家たち——ディオオン、ヘロデス・アッティコス、アリストイデ

¹¹ Bowersock (1969), p.14.

¹² Anderson (1986), p.10.

¹³ この一連の論争については、Boulanger, pp.58-73; Bompaire, pp.99-121; Reardon, pp.80-96; Bowersock (1969), pp.9-10 など。

¹⁴ Rohde, p.290, n.1.

ス等——が文体的には古典期のアッティカ散文を範と仰ぐいわゆる「アッティカ主義」的な志向を有していることを指摘した G. Kaibel は、これをむしろアウグストゥスの時代にハリカルナッソスのディオニュシオスが示したような、古典主義的な流れの延長に解すべきものとした¹⁵。Norden は前 5 世紀と後 2 世紀との散文の近似性を基本的に認めながらも、それとは異質なアジア主義的な傾向が同時に存在することを指摘した¹⁶。これらの議論を受けて Wilamowitz は、「アッティカ主義 — アジア主義」といった文体上の論争はクインティリアヌスの頃にはすでに過去の話題として扱われているがゆえに、その概念をもって「第二のソフィスト術」を説明しようとする自体が不適切であると、さらに、イソクラテスに代表される古典期のソフィスト的な営みは、それぞれの時代においてそれなりの変化を遂げながらも、ヘレニズム期、ローマ帝政期、そしてビザンツ期に到るまで、基本的には同質のものとして受け継がれていることを強調した¹⁷。その際に彼は、フィロストラトスにしか根拠のない「第二ソフィスト」という概念そのものの有効性に、強い疑念を呈してもいる。

これらの議論に通底するのは、しかし、そこにアジア的な没趣味を見るにせよ、古典期の模倣を見るにせよ、「第二ソフィスト」の文学はそれ自体としてはさして特筆に値するものではない、というある種の偏見だったといえよう。こうした先入観を払拭すべく、20 世紀に入ると、A. Boulanger による大部のアリステイデス研究、その流れを汲んだ J. Bompaire のルキアノス論、さらには B. Reardon による包括的な文芸研究といった、いずれも伝説による研究書が、帝政期のギリシア文学に独自の価値を見出す道を拓く¹⁸。また、1960 年代に発表された Bowersock の研究によって、より広汎な文化活動としての「第二ソフィスト時代」への視野が開かれ、今日の主流ともいべき文化史的な研究の潮流が、英米圏を中心に形成されていく。ただ、定義をめぐる問題に終始した 19 世紀の論争に懲りてか、近年では Second Sophistic という語そのものの定義を再検証しようという研究は、もはやほとんど影を潜めてしまった観がある¹⁹。この語が一定の文化現象を指し示すための便利なラベルとして機能している、という事実が先に立っているのである。

このように、「第二のソフィスト術」という言葉は、今日に至るまで、不安定な定義にようやく支えられるものでしかなかった。その一因として、フィロストラトスの記述そのものが必ずしも学問的検証に耐えうるような一貫性を具えたものではない、という否みがたい事実がある²⁰。そこで Wilamowitz などは、もとよりこの著者だけが用いている曖昧

¹⁵ Kaibel, pp.507-8.

¹⁶ Norden, I, pp.351-54. Cf. Wilamowitz, pp.21-22.

¹⁷ Wilamowitz, pp.13-14.

¹⁸ このうち Reardon は、「ギリシア小説」がそれ自体としてひとつの重要な研究分野となりうることを証明した。Cf. 中谷彩一郎訳、アキレウス・タティオス『レウキッペとクレイトポン』（京都大学学術出版会）2008, 「解説」。

¹⁹ たとえば近年の Bowie & Elsner による論文集を一瞥しても、この話題を正面から扱った論考は見られない。

²⁰ そもそもその「信頼性」を精確に見極めることが要求される。Cf. Jones, p.12.

な概念に振り回されるのは無益だと切り捨てる²¹。また、これまで「第二ソフィスト」を語ってきた多くの論者にしても、いわば何らかの「補助線」を引くことで、この概念にかろうじて輪郭を与えてきた、というのが実情であろう。本論では、以下においてあらためて『列伝』冒頭部の文言に着目し、「哲学」、「弁論術」そして「ソフィストの術」、このそれぞれの用語が背負っている歴史的背景を整理する。しかしこれもまた、フィロストラトスの内在的な理解というより、帝政期ローマの言語空間を理解するための、より有効な補助線の引き方を提案する試みにとどまるだろう。

3. 「哲学的」弁論術をめぐる

『列伝』の著者が「第一の」ソフィストとして具体的に名前を挙げているのは、ゴルギアス、プロタゴラス、クリティアスからイソクラテスまで、基本的にはわれわれがプラトンやアリストテレスの著作を介して「ソフィスト」として認識する人物群と一致する。そうした彼らの営みが、何ゆえ「哲学的」弁論術と形容されるのか。われわれは、カルネアデスまたはディオオンに代表されるように、一般に「哲学者」と目される者が弁論家的な活動に深く関わった例を知っている。けれども著者は、狭義の「哲学」に軸足を置くこうした者たちに関しては、わざわざ「本当の」ソフィストたちとは区別をたてて論じるという念の入りようであり、彼らの活動を指して「哲学的」弁論術と言っているわけではない。かといって、プラトン—アリストテレスによってわれわれに馴染みの〈哲学者〉対〈ソフィスト〉という構図をこの箇所を読み込もうとしても、語義そのものに矛盾が生じてしまうのは明らかである。

ここでまず思い起こされてよいのは、イソクラテスにおける「哲学」*φιλοσοφία* という語の用いられ方であろう。よく知られるように、彼は自らの弁論術的な営みにこの名称を用いているが、そこでの「哲学」とは、しかし、抽象的な思弁を斥けた、国家の政治に関わる市民としての現実的な姿勢を指すものだった²²。「厳密な知識」*ἐπιστήμη* よりもむしろ「健全な常識」*δόξα* が強調されていることから明らかなとおり、そこでははっきりとプラトンとは異なる、おそらくはライバルを強く意識しての「哲学」観が示されていた。こうしたもう一つの「哲学」は、しかしプラトン—アリストテレスら「主流派」の優位によって圧倒され、消滅した、というのが「哲学史」の常識であるのかも知れない²³。けれども、帝政期の修辞学文献に見られる *φιλοσοφία* の用例には、狭義の「哲学」には収まりきらない意味の広がりがあり、少なからず見受けられるのも事実である。

²¹ Wilamowitz が Boulanger のアリスティデス論に対する書評で語った「フィロストラトスによる、まったくもって無益な作りごと」という言葉が、彼の「第二ソフィスト」観を端的に示していよう。Cf. Bowersock (1969), p.10, n.5.

²² この問題については、廣川『イソクラテスの修辞学校』とくに第 5 章および第 8 章において詳細に論じられている。

²³ 廣川、pp.99-100.

ハリカルナッソスのディオニュシオスによる『古代弁論家・序説』は、その代表的な例といえよう。そこではアウグストゥスの治世における「政治的弁論」 *πολιτικοὶ λόγοι* の復活について、以下のような解説が施されている。

われわれに先行する時代にあつては、「古の哲学的弁論術」 *ἡ ἀρχαία καὶ φιλόσοφος ῥητορική* は踏みにじられ、ひどい侮蔑を受けて滅びかけていた。マケドニアのアレクサンドロス大王の死後、それは徐々に生気を失い衰えはじめ、われわれの時代ともなると、もうほとんど完全に消滅するところまで来ていたのだ。その地位に収まっていたのは「何か別の弁論術」 *ἑτέρα τις* であり、その見世物的な厚かましさは堪えがたく、没趣味で、「哲学」 *φιλοσοφία* ないしはその他「自由人にふさわしい教養」 *παίδευμα ἐλευθέριον* に何ら与るところのない代物だった。

これが著者ディオニュシオスの直前の時代までの状況だった。ところが、その要因が何であったかはともかく、自分たちの時代になって「古くて思慮ある弁論術」 *ἡ ἀρχαία καὶ σώφρων ῥητορική* は正当な地位を回復し、一方の「新しくて無分別なほう」 *ἡ νέα καὶ ἀνόητος* は、若干のアジア諸都市を例外として、ほとんどすたれてしまったという。ディオニュシオスはさらに、古典期の弁論家たちを扱う自らの論考が、「市民的な哲学」 *ἡ πολιτικὴ φιλοσοφία* の研鑽に励む人々にとって有為にして不可欠なものだ、とも述べている²⁴。またその『イソクラテス論』においては、「真の哲学」 *ἡ ἀληθινή φιλοσοφία* にいそしもうとする者、わけても実践において世を裨益すべくそれを志す者は、イソクラテスの示した道にこそ倣うべきだ、と促される。ディオニュシオスにおけるこうした *φιλοσοφία* の用法が、狭義の「哲学」を念頭に置いたものではなく、イソクラテスの用例に倣ったものであること、そしてそこでの「哲学的」 *φιλόσοφος* という形容詞は、むしろ「政治的」 *πολιτικός* というのに限りなく近いことは、これまでもすでに多くの論者によって指摘されてきた²⁵。

さて、われわれが先に掲げた『列伝』冒頭部の文言が、このディオニュシオス『序説』の二分法に——単に「哲学的」弁論術という用語だけではなく、ヘレニズム期に入って「何か別の弁論術」が生じたという認識においても——よく似通っているのは、容易に看取しうるところだろう。じっさい多くの研究者が、フィロストラトスの記述を解釈するための重要な鍵として、この箇所を援用してもきた²⁶。ただ、まさしくこの表面上の類似こそが、問題をかえって複雑にしてきた要因ではなかったか。すなわち、フィロストラトス

²⁴ D.H. *Orat. Vett.* 4.2: [ἀσκοῦσι Reiske: ἀκούουσι codd.]

²⁵ イソクラテスが帝政期を通じてソフィスト活動全般に与えた影響については、たとえば Hubbell の論考が参考になる。

²⁶ すでに Rohde に先立って、Blass が 1865 年に発表したその修辞学史においてこの箇所を言及しており、そこでは「第二ソフィスト」を「アジア的弁論」とする把握も示されている。Blass, pp.99-103.

における「古のソフィスト術」がイソクラテスな意味での「哲学的」弁論術であったとして、では「第二のソフィスト術」は、ディオニュシオスのいう、没趣味で無教養な「もうひとつの弁論術」と同じものを指すのか、それとも、まさしくディオニュシオス本人の貢献もあってアウグストゥスの時代に息を吹き返した「古の弁論術」の、新たな隆盛を言い当てたものと見るべきなのか。おおまかに言えば、Blass や Rohde は前者の立場に立ち、Kaibel やおそらく Wilamowitz は後者の理解を示した、ということになる。また、「古のソフィスト術」は現実的ないしは社会的な論題を扱ったが、「第二」のそれは、より散漫な題材を扱う、ある種の文芸 *belles lettres* に近いものとなった、という Reardon の総括もまた、はっきり前者をイソクラテス的な意味に解釈することで導かれるはずである²⁷。

フィロストラトスが「哲学的」弁論術という言葉を用いるとき、そこに認められる「哲学」とは、プラトンやアリストテレスのそれよりも、むしろイソクラテスのそれに近い——それについては、まずは大まかな構図として共有されるべき認識であると思われる。けれどもその上で、ディオニュシオスのいう *ἡ φιλόσοφος ῥητορική* とフィロストラトスのいう *ῥητορική φιλοσοφούσα* とが、本当に意味内容を共有するの点については、より慎重な検討が求められてよい。そもそも、同じく「哲学的」という訳語を当てておいた *φιλόσοφος* という形容詞と *φιλοσοφούσα* という分詞との違いを、考慮に入れる必要があるだろう。後者は *τὰ φιλοσοφούμενα ὑποτιθεμένη* と言い換えられていることから見ても、そこで扱われる論題の性質についての形容であると考えるのが妥当だろう。しかるに『列伝』の著者が「哲学的課題」として列挙するのは、「勇気」あるいは「正義」について、そして「英雄たち」や「神々」について、さらには「宇宙の形状」についてであって、これがイソクラテス的な意味での「哲学」*φιλοσοφία* を念頭に置いた記述であるとは考えにくい。また、「古のソフィストたち」の最後の一人として、たしかにイソクラテスに一章が割かれているものの、称賛はもっぱら文体上の秀逸さに向けられており、その「哲学」についての言及はまったく見られないのである。いずれにせよ、フィロストラトスのいう *ῥητορική φιλοσοφούσα* という言葉に、ディオニュシオスが範と仰いだようなイソクラテス的なものを積極的に読み込むことは難しい、と結論せねばならないだろう。

さらに、アウグストゥスの時代にディオニュシオスが「もうひとつの」弁論術について言及するとき、そこには明確な価値判断が介在していることを見逃すべきではない。彼にあっては、ヘレニズム期に言語的にも大きな変質をこうむったギリシア語のあり方を根本的に問い直し、その純粋な規範を確保することが喫緊の課題であったに違いない。その際、アジアを中心に広まった弁論は常に批判的、ないしははっきり侮蔑的に言及されており、こうした主観的な記述を根拠に「アジア的弁論」ないしは「アジア主義者」をはたしてどれだけ実体的に、もしくは自覚的な営みとして見積もることができるのか、そのこと自体にじつは大きな問題が内在する。これに対してフィロストラトスにおいては、「第一の」

²⁷ Reardon (1984), p.24.

ソフィストと「第二の」それとの優劣を論じようという意図はまったく認められない。むしろ記述の軸足は、彼と時代を共有する「第二の」ソフィストたちのほうにある。現にヘロデスやあるいはアリスティデスといった具体的なソフィスト像がまず眼前にあって、そうした彼らの営みを古典期のソフィストたちに関係づけていかに説明するか、それこそが『列伝』という著作の眼目であったに違いない。

以上のとおり、フィロストラトスのいう「第二のソフィスト術」を理解するうえで、ディオニュシオスにおいて典型的に認められるような「アッティカ主義とアジア主義」といった対立軸を持ち込むことは、有効な方法とはなりえない——これはすでに、Wilamowitzの指摘するところであった。けれども、だからといって「第二のソフィスト術」という概念そのものを、無益なものだとあっさり切り捨てるのがよいとも思われない。求められるべきは、より有効な補助線ということになる。

4. thesis と hypothesis

すでに指摘したとおり、フィロストラトスのいう「哲学的」弁論術 *ῥητορικὴ φιλοσοφοῦσα* とは、そこで扱われる論題の性質についての表現であると考えられる。そうであるならば、著者が古のソフィスト術と「第二の」それとを区別する最大の基準は、扱われる題材の違いにこそあった、という見方が成り立つのではないか。

ところで、論題の性質に応じて弁論術を分類する際のひとつの基準として広く知られていたのが、前2世紀のヘルマゴラスが提示したとされる、「一般論題」*θέσις* と「個別論題」*ὑπόθεσις* との二分法である。すなわち、およそ弁論術の扱う論題は、「個別具体的な状況を伴わないもの」(=前者)と「それらの規定を伴うもの」(=後者)とに分けられる、という基本認識が、ヘレニズム期以降のギリシア修辞学において一貫して共有されることになる。このうち前者の「一般論題」については、たとえばキケロは『発想論』において、それに該当する例として「名誉のほかには善はあるか」、「感覚は嘘をつかないか」、さらには「世界の形状はどのようなものか」といった論題を紹介している²⁸。また後者は、弁論家たちが扱ういわゆる「模擬弁論」*declamatio / μελέτη* の題材に一致すると考えられ、そこでは通常、具体的な人物、時代状況等が設定される²⁹。

こうした区分法は、ヘレニズム期以降に弁論術 *ῥητορικὴ* の領域で起こったある質的な変化を反映して登場したものと考えられる。古典期に都市国家という社会のあり方と不可分に結びついたかたちで、公の場での「説得の技術」として出発した弁論術は、アレクサンドロス大王以降、国家のあり方の変化に応じて、その役割の変更を余儀なくされる。そ

²⁸ Cic. *De inv.* 1.8.

²⁹ なお *ὑπόθεσις* という術語の有するいくつかの意味合いについては、金山弥平・金山万里子訳、セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁1』(京都大学出版会)2004, 補注 V および W に詳細な解説がある。

の際、法廷向け *controversia* および議会向け *suasoria* の体裁をとった「模擬弁論」*declamatio* こそが、彼らの主要な領分となっていく。その一方で、もともとペリパトス派の対話術 *διαλεκτική* に由来すると目される、「一般論題」*θέσις* を扱う言論の訓練が、ヘレニズム期になると弁論術の一部として取り入れられたと考えられる³⁰。抽象度の高い論題を正・反 (*pro / contra*) 双方の立場から論じることを旨とするこうした営みは、帝政期に入ると、「寓話」や「叙述」など、文法学で扱う諸課題とともに「プロギュムナスマタ」*προγυμνάσματα* と呼ばれる一連の予備教程を構成し、教養としての弁論術の中核的な役割を担っていく³¹。「一般論題」を核とする予備教程と「模擬弁論」、この両者が相俟って帝政期のギリシア弁論術の総体を形づくることになるのだが、こうした対象領域の質的な変化に連動するかたちで、理論の方面においても、狭義の「哲学」をもそこに包摂するような、言語活動の全般を「弁論術」の枠内で説明する試みが登場し、それが帝政期を経てビザンツ期に到るまで、ひろく弁論術の骨格を規定することになる。

さて、こうした二分法を念頭に置くならば、「哲学的」弁論術とは、つまりは「一般論題」を扱う弁論術を指すと考えることができる。そもそも同じ二分法を前提として、「一般論題」とはすなわち哲学者の扱う領域のことである、という認識が、ヘレニズム期の哲学諸派において広く共有されていたようである³²。たとえば1世紀のディオンは、哲学者たちが扱う論題の典型として「結婚すべきか」あるいは「政治に関わるべきか」といった例を挙げているが、興味深いのは、そればかりでなく「誰に対して」、「いかなる条件のもとに」といった要素をも一定の範囲内で伴いうるという記述である。その条件とは、たとえば「戦争すべきか」という論題であれば、弁論家が扱う「状況を伴う論題」*περιστατικά* のように、「アテナイ人にとってペロポネソス勢と戦争することは有益か」とか「ケルキュラ人はコリントス人に加勢すべきか」というのではなく、「先に不正を働いたのではない相手に、戦争を仕掛けることは正しいか」といった具合に問題を立てねばならない、と説明されている³³。

もう一つ興味深いのは、「一般論題」を扱う営みは「個別論題」を扱う模擬弁論よりも古い、という漠然とした認識が、帝政期に広く共有されていた、という事実である。プロギュムナスマタに初めて理論的な根拠を与えた1世紀のテオンは、同時代の弁論術に見られる「模擬弁論」偏重の傾向を批判し、昔の弁論家たちは、まずは「哲学」*φιλοσοφία* ないしは「一般教養」*ἐγκύκλια μαθήματα* を修めたうえで弁論活動に赴いていた、と説く³⁴。

³⁰ これは、哲学的な営みが限りなく弁論術に接近した結果とも評しうる。たとえばストラボン、テオフラストス以降のペリパトス派に関して、彼らがほとんどまともな書物を手元に置かず、内容のある哲学をせずただ「一般論題」を虚ろに響かせるばかりだ (*θέσεις ληκυθίζειν*) と述べている。Str.13.1.54. Cf. Arnim, pp.81-83.

³¹ その代表的なものとして、堀尾耕一「アプトニオス『プロギュムナスマタ』(翻訳と解題)」東京大学西洋古典学研究室紀要 II (2006), pp.45-86 を参照されたい (Web 上にて閲覧可)。

³² Arnim, pp.93-94.

³³ Dio. Or. 22.3; Throm. p.107.

³⁴ Theon Prog. Praef. 59.1.

また、プロギュムナスマタという課程がついに定着しなかったラテン修辞学においても、同様の証言が見られる。たとえば大セネカは、紀元 30 年代に記した模擬弁論に関する著作において、キケロが行っていた模擬弁論 *declamatio* の性質に関して「今日のわれわれが論判弁論 *controversia* と呼んでいるようなものではなく、キケロ以前に行われていた一般論題 *thesis* と呼ばれるものでもない」という言い方をしている³⁵。あるいは 2 世紀初頭に弁論家について論じたスエトニウスは、「一般論題」をはじめとするプロギュムナスマタの諸課題に言及したうえで、これらが次第に姿を消し、法廷型の論判弁論 *controversia* に取って代わったのだ、と説明する³⁶。

以上を総合するならば、帝政期にはひろく浸透していたと思われる「一般論題」と「個別論題」という二分法においては、前者について、それが「哲学」に係る領域を扱い、かつ、より古い、という認識が共有されていたと結論できるだろう。となると、3 世紀のフィロストラトスが『列伝』を記した際に、修辞理論の基本であるこの二分法を暗黙のうちに前提としていた可能性は、きわめて高いと見てよいのではないか。

もう一度、『列伝』冒頭部の記述に戻ってみよう。「古のソフィスト術」が扱っていた「哲学的」課題として列挙される、「勇気について」から「神々について」あるいは「世界の形状について」までの話題の広がり、まさしくキケロが言及していた「一般論題」*θέσις* の範囲に一致する。さらに「第二のソフィスト術」については、「貧乏人や金持ち、王侯や独裁者たちを描き出し、歴史上の個々具体的な論題 *ὑπόθεσις* (!) を扱った」とある。ここでの *ὑπόθεσις* とは、まさに上記の二区分を踏まえた「個別論題」のことであると相違ないだろう。これは、じっさいに第二ソフィストたちの扱った弁論のタイトルを見れば、いっそうはっきりしてくる。たとえば『列伝』では、この時期を代表するソフィストであるアリスティデスの代表作として、『アテナイ人を海上覇権から引き離そうとするイソクラテス』、『十人の将軍を埋葬しなかった件でカリクセイノスを弾劾する』、あるいは『シケリア情勢について審議する人々』等、歴史的にして個別具体的な状況を設定したうえで架空の弁論を行うという、いわゆる模擬弁論の典型的な主題が列挙されているのである。

ここまでの考察から、フィロストラトスのいう二つのソフィスト術の違いとは、この「一般論題」と「個別論題」という、弁論術において扱われるべき論題の質的な相違を反映したものだと考えることが許されよう。その際、「哲学的」すなわち「哲学的な課題を論じる」弁論術 *τὰ φιλοσοφούμενα ὑποτιθεμένη* とは、「一般論題」を扱う弁論術と読み替えることができ、これに対して「第二のソフィスト術」が扱う題材は、つまりは、法廷や議會を想定した「個別論題」を扱う弁論術の領域に等しい、ということになる。

³⁵ Sen. *Con.* 1.praef.12.

³⁶ Suet. *Rhet.* 4.

5. ソフィストの術と「演示」

この「補助線」が有効なものであるのか、最後に「ソフィスト術」 *σοφιστική* という言葉の用いられ方に着目し、その変遷を確認してみたい。上の理解に従うならば、古典期と帝政期とでは、ソフィストたちの扱う対象領域が大きくその性質を違えるようになった、という見通しが得られるはずである。

まず、古典期を代表するアリストテレスの『弁論術』においては、弁証術に通じた者との対比でソフィストが定義づけられており、彼の提唱した訴訟・審議・演示からなる「弁論の三類別」において、ソフィストの術が関与する領域は想定されていない³⁷。けれども、このうち第三の「演示」の類は、おそらくはイソクラテスの活動を強く意識して新たに立てられたものと考えられ、当初からソフィストの術と重なり合う関係にあったといえる³⁸。

この三類別を念頭に、キケロは『弁論家』を執筆するにあたって、「イソクラテスをはじめソフィストと呼ばれた者たちが書いた『パネギュリコス（民族祭典演説）』の類い、あるいは公の場での争論とはかけ離れた言論の様式、総じてギリシア語で「演示」 *ἐπιδεικτικόν* と呼ばれる種類の全般は、これを論考の対象に含めることはしない」と宣言している³⁹。また、「甘美にして流麗、機知に富み、言葉の響きに満ちた弁論を旨とする演示の類——それこそソフィストたちの本領であったわけだが、こうした弁論は戦いというよりお祭り向きで、体育場や訓練の場にとっておかれはしても、公論の場では蔑まれ、放逐されたのだ⁴⁰」とも。

これとちょうど表裏の関係をなす記述が、キケロと同時代のエピクロスの徒、フィロデモスの『弁論術について』に確認される。ここでは「ソフィストの術」 *σοφιστική* という語は「政治の術」 *πολιτική* と区別され、前者のみが技術 *τέχνη* の名に値することが強調される。その際、*σοφιστική* は弁論術 *ρήτορική* の一部ではなく、それ自体として独立した技術であるとされ、同時に、アリストテレスに由来する「弁論の三類別」が無効であることが宣告される。すなわち、三つの類とされるものに対比した場合、ソフィストの術は祭典の類 *πανηγυρικόν* に対応するが、これを政治 *πολιτικόν* および訴訟 *δικανικόν* の類と同列に扱うべきではない——後の二者はそもそも技術の名に値しない、というのである⁴¹。

³⁷ Arist. *Rh.* 1.1: 1355b17.

³⁸ 「第三の類」がアリストテレスによって最初に導入されたことについては、Cic. *De orat.* 2.43. なお、この三類別と、後から成立した「一般論題 / 個別論題」の二分法との関係は、複雑な問題を内包する。このうち「訴訟」および「審議」の類が「個別論題」に該当することは論を俟たないが、「演示」と「一般論題」との折り合いについては、文献によってその理解は多様である。Cf. 堀尾耕一「プロギュムナスマタ文献の伝承について」『フィロロギカ』1 (2006), pp.1-17.

³⁹ Cic. *Orat.* 37.

⁴⁰ Ib. 42: Dulce igitur orationis genus et solutum et fluens, sententiis argutum, verbis sonans est in illo **epidictico genere**, quod diximus **proprium sophistarum**, pompae quam pugnae aptius, gymnasiis et palaestrae dicatum, **spretum et pulsum foro**.

⁴¹ Phld. *Rh.* 2 PHerc. 1674 col. XLIII; LVIII. Cf. C. Chandler, *Philodemus On Rhetoric Books 1 and 2*, New York 2006. pp.99-102.

この両者の鮮やかな対照は、レトリック的な営みに対するギリシア人とローマ人との違いを如実に示す例として興味深い⁴²、いずれにせよ前1世紀に活動した両者の認識では、イソクラテス流の「演示」を旨とする「ソフィストの術」と、法廷や議会の言説を扱う「弁論家の営み」とは、本来的に異質なものだという点では一致していることが分かる⁴³。

弁論術を大きく「演示的」なもの、「政治的」なものとの二つに区別する考え方は、たとえばフィロストラトスにやや遅れる、3世紀末のメナンドロスにおいても共有されている。ただし注目すべきは、その記述からかいま見える、ソフィストたちの活動領域についての認識である。

「演示弁論」に属するのは、「非難」および「称賛」である。すなわち、いわゆるソフィストたちの行っているような「政治的弁論の演示」、それは「討論を模した訓練（＝模擬弁論）」ではあっても本来の「演示」ではない、というのがわれわれの主張である⁴⁴。

このメナンドロスの見解は、アリストテレス『弁論術』の理論に立ち返って本来の「演示弁論」を規定しようという、ある意味では時代錯誤的なものといえる⁴⁵。その際、アリストテレスの時代、あるいはキケロの時代には想定されていなかった事態、すなわち、いわゆるソフィストたちが、いまや法廷や議会を模した模擬弁論のパフォーマンスを行っている、という帝政期的な言説空間の実態が、はからずも言い当てられているのが確認できるだろう。時代の推移とともに、ソフィストたちの領分は、称賛を中心とする本来の演示弁論とはかけ離れた、演示的な模擬弁論へと、はっきり移行してしまったのである。

結

ソフィストの術を認識論的ないしは意味論的な視点からではなく、あくまで「弁舌の巧み」*δεινότης* という切り口で眺めるフィロストラトスにとって、古典期から帝政期に至るまで、広い意味での「演示」すなわち弁論のパフォーマンスを競い合う、等しく「ソフィ

⁴² すなわちギリシア人における弁論術は最終的に「演示」的なものへと収斂していくが、ローマ人にとって、実用を離れた「ソフィスト的なもの」は基本的に敬遠された。Cf. Plut. *Comp. Dem. Cic.* 2.

⁴³ 一般に模擬弁論 *μελέτη* / *declamatio* という場合、その内容は法廷型もしくは議会型のいずれかに限られる。すなわち本来そこに、称賛その他の演示弁論は含まれない。Cf. Russell, p.10.

⁴⁴ Men. *Rh.* I, 331.15: τῶν δὲ ἐπιδεικτικῶν τὸ μὲν ψόγος, τὸ δὲ ἔπαινος· ἄς γὰρ ἐπιδείξει λόγων πολιτικῶν οἱ σοφισταὶ καλούμενοι ποιῶνται, μελέτην ἀγώνων εἶναι φάμεν, οὐκ ἐπιδείξιν.

⁴⁵ そもそも帝政期において弁論の「第三の類」を言い当てるには *ἐγκωμιστικόν* ないしは *πανηγυρικόν* を用いるのが一般であり、伝存する修辞学文献にあってアリストテレス以外に *ἐπιδεικτικόν* という用語を用いた例はごく稀にしか見られない。Cf. 堀尾耕一「アナクシメネス『弁論術』と弁論の三類別」『フィロロギカ』2 (2007), pp.41-54.

スト」と呼ばれるべき者たちの姿があった。ただ、『ヘレネ礼賛』を語るゴルギアスと『シケリア情勢について審議する人々』を語るアリスティデスとでは、そこで語られる題材の性質に明らかな違いがある。この相違点を言い当てるべく、『列伝』の著者は「第二のソフィスト術」という形容を必要とした。そして、もっぱら「模擬弁論」を領分とするようになった同時代のソフィストたちの営みと比べたとき、古のソフィスト術は、「個別論題」と対置されるところの「哲学的な課題を扱う」弁論術として把握された、と考えることができるだろう。

文献表

- G. Anderson, *Philostratus: Biography and Belle Lettres in the Third Century A. D.*, London 1986.
- G. Anderson, *The Second Sophistic: A Cultural Phenomenon in the Roman Empire*, London 1993.
- H. von Arnim, *Leben und Werke des Dio von Prusa*, Berlin 1898.
- F. Blass, *Die griechische Beredsamkeit*, Berlin 1865.
- J. Bompaire, *Lucien écrivain: Imitation et création*, Paris 1958.
- A. Boulanger, *Aelius Aristide et la sophistique dans la province d'asie au IIe siècle de notre ère*, Paris 1923.
- G. W. Bowersock, *Greek Sophists in the Roman Empire*, Oxford 1969.
- G. W. Bowersock (ed.), *Approaches to the Second Sophistic*, American Philological Association 1974.
- G. W. Bowersock, 'The Greek Renaissance', in Bowersock (1974).
- E. Bowie & J. Elsner (eds.), *Philostratus*, Cambridge 2008.
- J. Fairweather, *Seneca the Elder*, Cambridge 1981.
- H. M. Hubbell, *The Influence of Isocrates on Cicero, Dionysius and Aristides*, New Haven 1913.
- C. P. Jones, 'The Reliability of Philostratus', in Bowersock (1974).
- G. Kaibel, 'Dionysios von Halikarnass und die Sophistik', *Hermes* 20 (1885), pp.497-513.
- G. A. Kennedy, 'The Sophists as Declaimers', in Bowersock (1974).
- E. Norden, *Die antike Kunstprosa*, Leipzig 1898; 2 ed. 1909 (repr. 1958).
- B. P. Reardon, *Courants littéraires grecs des IIe et IIIe siècles après J.-C.*, Paris 1971.
- B. P. Reardon, 'The Second Sophistic', in W. Treadgold (ed.), *Renaissances before the Renaissance*, Stanford 1984.
- E. Rohde, *Der griechische Roman und seine Vorläufer*, Leipzig 1876.
- D. A. Russell, *Greek Declamation*, Cambridge 1983.
- T. Schmitz, 'Narrator and audience in Philostratus' *Lives of the Sophists*', in Bowie & Elsner.

- H. Throm, *Die Thesis: Ein Beitrag zu ihrer Entstehung und Geschichte*, Paderborn 1932.
- U. von Wilamowitz-Moellendorff, 'Asianismus und Atticismus', *Hermes* 35 (1900), pp.1-52.
- W. C. Wright, *Philostratus: Lives of the Sophists*, Cambridge MA. (Loeb), 1921.
- 木曾明子・戸高和弘（訳）ディオニュシオス『修辞学論集』（京都大学学術出版会）2004.
- 戸塚七郎・金子佳司（訳）ピロストラトス『ソフィスト列伝』（京都大学学術出版会）2001.
- 納富信留『ソフィストとは誰か？』（人文書院）2006.
- 廣川洋一『イソクラテスの修辞学校』（岩波書店）1984.

<付記>

本稿は2013年9月14・15両日にわたり開催された第17回共同研究セミナーの場で行った口頭発表の原稿に、加筆したものである。当日にいただいた多くの先生方からのご質問、ご指摘によって、多くを学ばせていただいたと同時に、今後の研究へと踏み出すための多大な勇気を頂戴したように思う。ここに記して感謝の意を表したい。